



09
蔵
巻

るを

籍

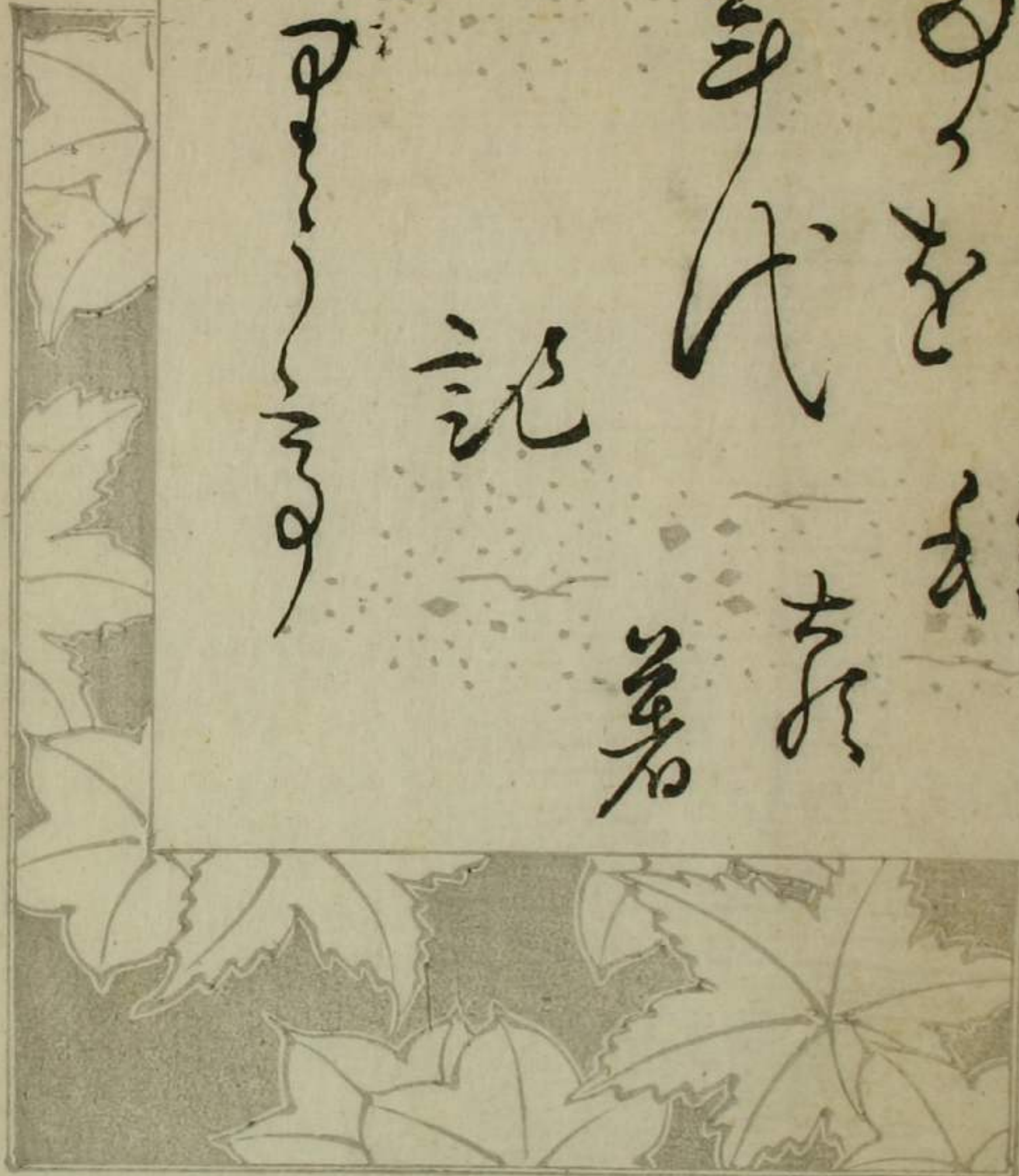
多代

著

著

記

Penner



Red square seal impression, likely a collector's or library's stamp.

うらやまのうらやまをうけあいの
たきまねし若のそそあはれを世の仲
ふたのうをうけあひめねにうらやま
雨の音にうらやまのうらやまにうらやま
つげをうけあひにうらやまにうらやま
かんさうのうらやまにうらやまのうらやま
うらやまのうらやまにうらやまにうらやま
うらやまのうらやまにうらやまにうらやま
うらやまのうらやまにうらやまにうらやま
うらやまのうらやまにうらやまにうらやま

11

却せしむらむと也らもなみだ武世のらと
そ枝もはさめあつたむきお祓紙
のるる球くもやみち原にも即れ病
かかすむいさめいと思ひたかこし
素じりあはれあつたむきお祓紙
即ちもあつたむきお祓紙
幸しあつたむきお祓紙
えりたそい様にもよるて思ひたかこし
清みり又にかん申るあつたむきお祓紙

そむきいさめあつたむきお祓紙
まらちあつたむきお祓紙
よらまらちあつたむきお祓紙
局しあつたむきお祓紙
ひらく付へあつたむきお祓紙
まらちあつたむきお祓紙
とくあつたむきお祓紙
赤あつたむきお祓紙
のぼあつたむきお祓紙

申の路んら城なぐく十の二人ら
うはめの智るらして吉野の尾り
かみさくせんかして尾のよの
志すにたんことさるる阿の
世に侍らる相牛の松の佐久
たかろ 星の竹の尾り
月夜にそその名こと申る今
の考
つおけさもち知たてらるる
月の素をせぬおることし
のまた

つんま如こらに柳の美の法
をまの枝のさるるにまの
こよまかたのまも
ちん山のまのまの
若ささ佳お光ぬる
月に神のぬらつら
いやらたて
侍へんと
の書た
つら
又さ
松
の

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

Handwritten text in Arabic script, likely a title or header.

九例

○高尾考ハ明和の頃原富翁古老の傳及自の記憶を以て筆記されし初め多き又作者不知物二三本あり今好事の人寫し傳へる珍重せり天明より享和に至り何某のしこれ等の先生前の高尾考を原より古書を引校正ありし本あり今又是を増補せしをそのまゝしとやらんれが予が友よりふ竹本氏豊芥子とげり三亭子その他より吉原の古書を多く藏せり人あや其うちあり先達の眼ふあをきりしと地がし物もよくありし前書ふもれりを書かへりいものし

○代々の高尾のあやゆき或は出生の地或は其身の地あり等の事、前書及それ等の雜書ふも見えれど其説區々して愚意ハ是非を定め難けきばかりし省き唯年表年立なる物の如く代々のなごめの見安かりん事のしとを要とせ

高尾の傳ハ何れ先生古書ハ更なり生産の地ハ傳へる古老の茶話や周あふぐまもとあられし他の眼や多き奇本ありと兼て聞けり彼書發市のしと候是ハ照して見ぬる予が誤りも多し適考へ得る功も顯れ老木の柳も思ふにあり緑の春ふあはれもせん歎

○古書といふも悉く取難し其故如何ともある寛文二年の吉原伊勢物語ハ箕山が大鑑より引し新町をじ男と同本あり元祿の幕揃ハ延寶の芥川あり是のしとるに原來一時の戯を草紙とて改彫改めたる年号を削りしハ入木多し見ゆし用捨してハ抄出されど誤りも多し

○万治より元祿に至るの間予が意を用ひ前書より及じし事もたゞいおれども寶永より末はいつか先達の説を改めたる記しねり

千時天保辛丑子月念八日

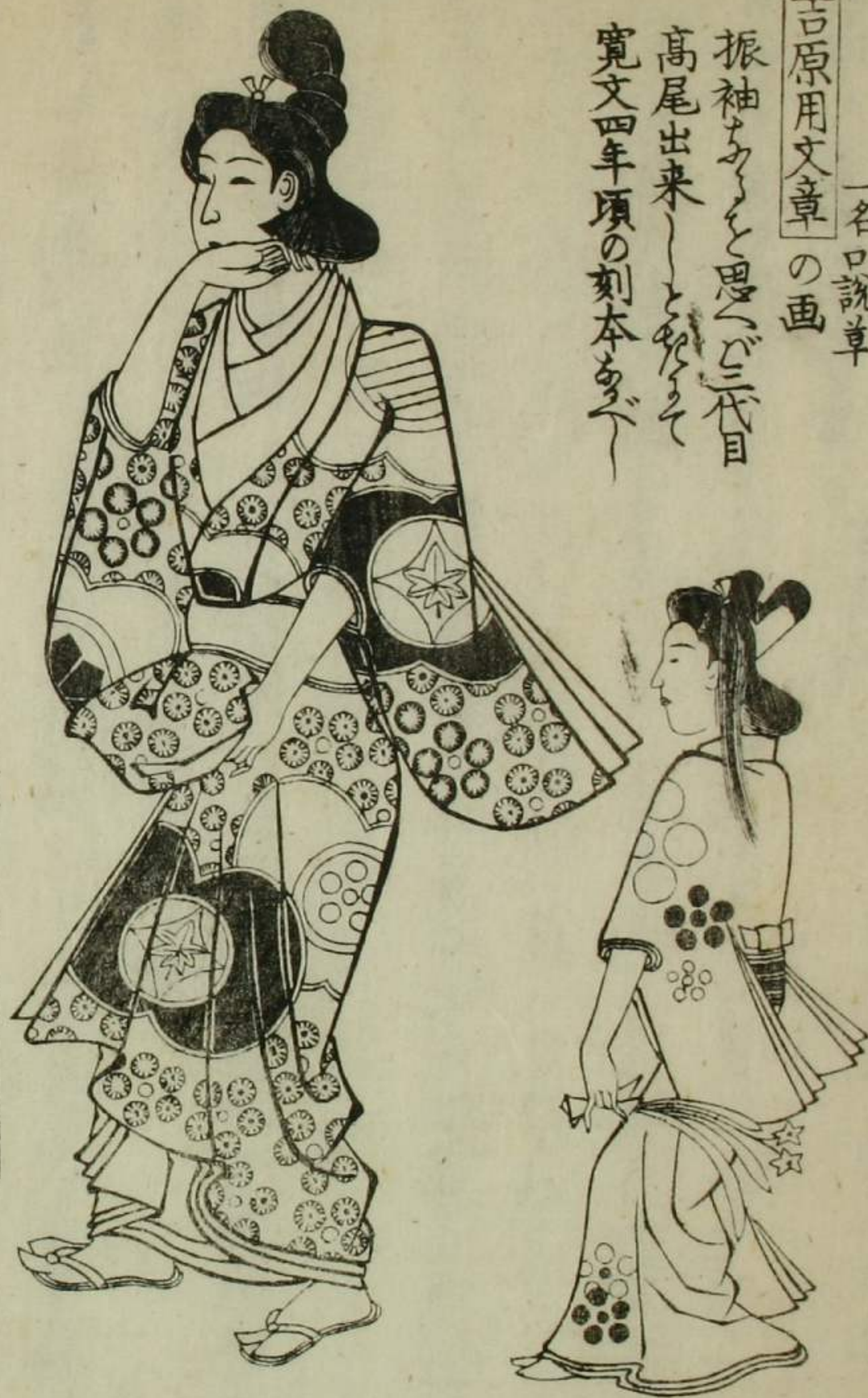
雪閑戸

倭紫樓上 柳翁記

一名口説草

吉原用文章の画

振袖をきくと思ふに二目
高尾出来と云ふ
寛文四年頃の刻本あり



延宝二年印本吉原失墜の引書
くせう草とある此用文章の事也



是こそその
うまじたり
ものめ
我ら
志
ぐれ
よ
あゝ
あるさび
どにさ
のすん
こん

やうてひさ
うろろ
ころろ

右よ摸く吉原六方あり予が前よ著く用捨箱あり
如く寛文中の草紙ありとれど用文章とハ画風
異なり

此高尾の前よ新町やうき人内せん志ゆゆて同内と記
しこれハ當時の高尾ハやうき人の家よわし秋

「高尾が部屋見さう
見よ見よ
今物や見よ
たか
少袖 色少袖
いろ少袖
高雄寛保ふ絶天保ふ
て百年近曾
小石川大塚を少女盆歌
おかくくくく聞え昔
志の名く日記のうち
く書加(かき)と
録也

急ぎ町

一せきめん内さうし いちぢりたるをさし見さ月
 一きさの内さうし ひめんたるをさしやうたるやあき
 たんとたのむ ちけさめん

京町

一ぢら内さうし さうりせたるをさしたるを 大さう
 せさきおせさうりせたるをさしたるを
 一ぢら内さうし おさう ささみさうさう おさうさうせ
 ささみさうさうさう さうさう さうさう たるを

當時さん茶をいすりのおく格子さう一段さなまを端よりそれより
 如此さうをの名四人をあれども太夫ありさうを見ささ

○巻中の画は高雄の事ありさうさうさうと漸々小画風のかさやゆるさを
 一これが見あふ人の目ささう草小筆のついでよ模さう

此草紙の板元ハニッ橋
 と名のり京二条通鳥
 丸之昔ハ江戸より草
 稿をのゆせ彼地
 製本志すものゆ
 画ハ京の人のささうの飲



一多し町のいさるす 十九畝
 一三まろ町のいさるす 十七畝
 一よま町のいさるす 七畝
 一新町のいさるす 廿二畝
 一すま町のいさるす 三十畝
 一二町めれのいさるす 廿九畝
 一けりれのいさるす 廿二畝

一けりーあけや 廿八人
 一中の町あけや 十人
 一新町のあけや 九人
 二町めれのうあけや 八人

五町よま町もくろ川いさるす合百二十五畝
 寛永十九年 六月吉日 清兵衛開板

如此巻尾あち後小摺たる本出此半葉無二十五葉を全し
 寛永廿年ふ廿六丁廿七丁二葉を彫添廿二丁小二行入木して脱
 一とては補ひ 本を見らば是れ太夫より高尾あり

高尾二

この増補の廿六葉小

この十六人のたゆふたじとんぞうるあり」と記し十六人の名をのうらに

茶町

西の茶町内 屋敷とて 十六

屋敷とてはゆりけいしんとおのりもあはる
 花のしらさうらり 一と
 たるお 十六
 たりを屋敷とてのあはしとのえり
 ゆめもいけいよのいぬあはるらん

寛永二十年 九月吉日

大夫高尾の名をいかにゆめて見ゆ

とわれども是と初代と定めがごとく按ふに九月と記し
 草稿と京(坊)で刺成しよきの月と書しよきもあはる其故
 同寛永廿年同九月此きりし作者吉原(行)彼とんぞうの

太丈祓物うしろしめし

かりしりねし
 以下畧
 以下れ名はなかりし

いさ
 畧中
 細焼

畧中

いさ
 畧中
 細焼

いさ
 畧中
 細焼

いさ
 畧中
 細焼

柳翁曰此草紙は今の細見記の如く中小路と屋を向側へ逆よ記を茲に新町北側の娼屋あれど用をなれは摸さざり
 如此太夫の他▲格子小高尾三人
 阿婆此後ハ三浦屋の太夫一人の名不定まれり其丈寛文七年の條中より記を照し合せて見ゆべし

高尾四

あつのつき

高尾 京町
 高尾 三浦内

成人のいそ月ある男をやくね成りそり
 多うとさきてさけいせうらる鞠の作ゆりそり
 といた鞠とて物新敷内も書よありげ又ありあり
 書全るるも屋よたざどそのどくけいせいりいも
 月の内におおしげいみありさくふあてもてさくむ
 鞠のこくまあるはさる程はらとんえさり月の
 さくまありさくむとくせいのめらうさかひさあせハ
 是さくまよりさくむてけいさくむさくむ又さくむ
 鞠をくらうさくむさくむてあていさくむさくむハ
 ころあくさくむさくむさくむさくむさくむ又ハ

小月高雄
 うた
 君
 たる
 りみち
 あり



+

柳翁云

格子。名。吉原町の圖自初丁至八丁。高雄の太夫の第也

高尾五

系所ノミナリ内

高尾物語

かたひきけりかたひき

つとむひそ
うたえんを
うけこむを
うまきあき
まらるる月



○此万治三年より廿九年
の後印行考るる言藤子
貞享 名木の部小
高尾の紅葉
高尾村正光院の
浄土寺よりその
昔系三浦甲斐守
が所の二代目の高尾
りちりちりしき事
はいふも更ありし終ら
佐理行成りも舟りし
くく三十丁をまた
とを万治のうまき

高尾七

つとむひそ
うたえんを
うけこむを
うまきあき
まらるる月



つとむひそ
うたえんを
うけこむを
うまきあき
まらるる月



女ありしふねりし高尾
よねられ万治のうま
りちりちりしき事
今の正光院の客殿の
左の方より傳へる高尾
心と改名して高尾と
の考へしは紅葉と一
ら高尾の紅葉の考へ
の細本考へしは今
かたひきけりの大
あやね秋の良の好
ハ余本より考へる
更懐考へる高尾

此の物語は
日と夜とを
さするもの
とてめでた
くもてめで



めりり
あつとやむ
つまのけん
たりの人此
存とらち
きり
ういもあ
ちつとやむ
ほとある
きり
あつとやむ
やうす



以下半葉程欠り

とて墓ハ無キカ
あつとやむ
より一記と此光院の
事ハ諸先生の説あり
未尋
○上小模々ハ此高尾病
死の刻の過賣の卓紙俗
以下賣あり此歌を見
高尾小女兒男のり
あれさる作りて人の
浮名候くしあきか讀賣
のかりあれは是と証
ありかたわ

高尾ハ

寛文元
二
三
四
五
六

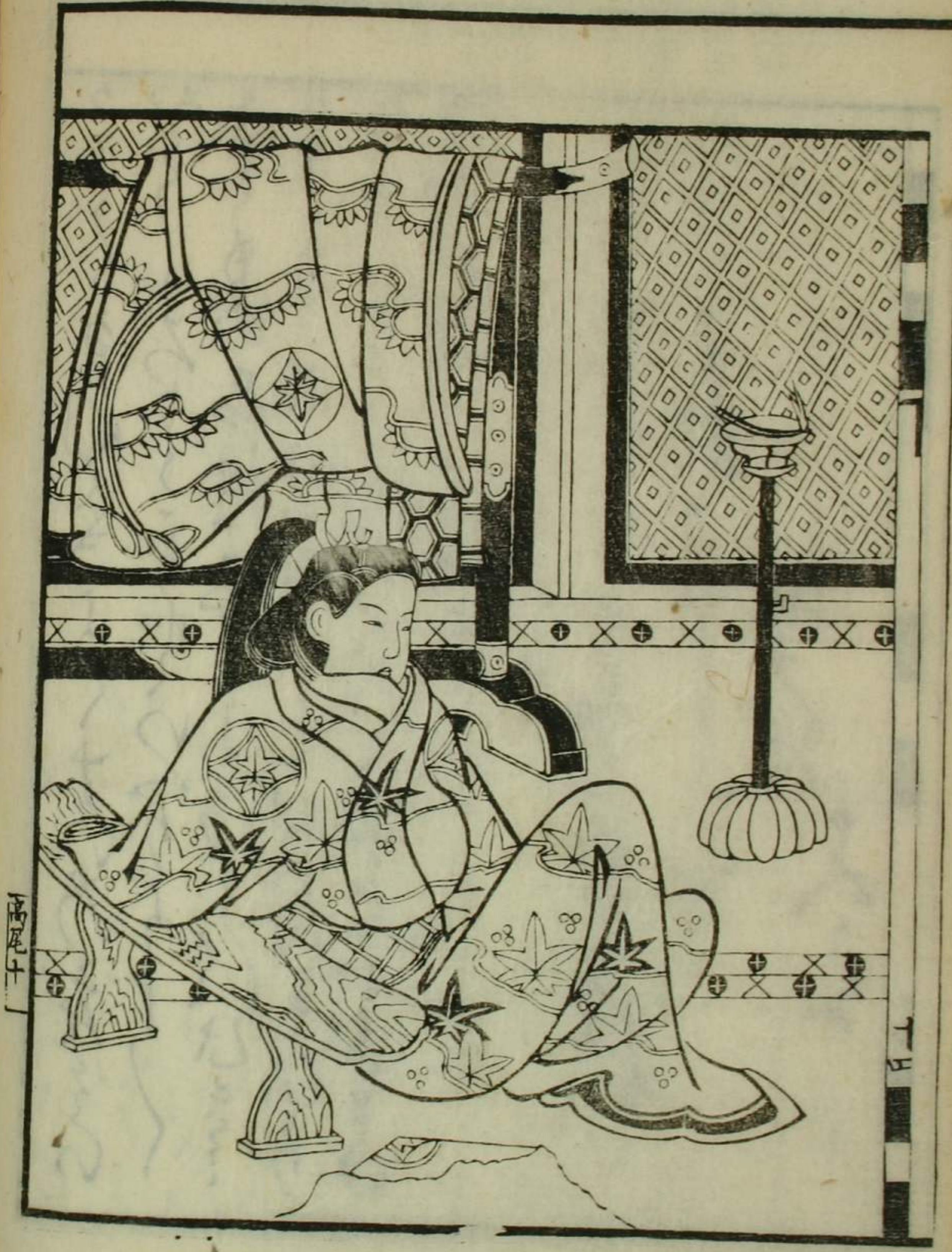
三代目

開板 吉原根元記 小三代目高雄の姿画あや左小模と

按小此年間高尾の出来一ヤム一其事下に見えり

此高尾物語小身請の事あり弘願山のひ傳（弘願山）高尾身請せ
られ此寺門の前を来るときに没（没）り故小女之葬り（葬り）予按
ちる後年を妙身高尾といひ傳へば思（思）はる如く花街を出
程多死（死）るも此万治三年より九年の後刊行の讚朝記（讚朝記）に
かりり物轉譽めり墓（墓）又「三常」物道折（折）がま
の音（音）あつと見（見）む高尾の墓此西方寺（西方寺）古くありあはるに
葉目小代目高尾の事あり今の俗傳（俗傳）に似り是ハ全彼二河白道の
類（類）なる虚説と貞享の頃彫添（彫添）り（後年彫添と考証あり
ども支考をればなり）

下職原小云三九高尾或書小曰く宗高尾
高尾代々のつらの能筆



高尾十

開

吉原讚朝記

一名時の太鼓



たうとらうら

糸丁

三浦里存の内

此根元記次小録をも「讚朝記」袖鑑の三種の端寫本にて流
 布一其後小添削し刻し物ある故是れ彼書をも
 して彼書よ此冊子を難しけれ前小成し書かる事詳
 かくん此所より予が見る刻本の順小記を具し以下摘要の
 略文等あるゆゑ予も摸しおるべし
此三種の草紙小傳も
 大全との書未見

袖るふよ曰太夫四天王の第一あり多門天の位ありあはれあり
 一略中志きせんしゆふくうぬ祿もあれどもやいづてはしそあを
 ぬあり希いあらむむくうぬもはれこをそを宗とせんの字はえ
 ことあり略中志原女志とせんあはれありと思ひ三卷の水ありして

此町に位て久しなればかあぶれも思ふ侍ると云根元記曰あまの人の問て
 りてくはわある花のまじ妙あるをなれば如くより昔て白き花と云ふ
 の時と云ふは傳もあまの侍りてと云此後同書と云ははるられば
 中君十四五のあまの侍りて理りあまの侍りて今時を今年に廿と
 坊はゆきまのちんといちう金盛の花の時あれといふと云ふと云ふと云
 人略或人の曰はし去年の春の頃より今か坊中と云ふあまの侍り
 まんぼと云ふのたまを花と云ふ名のまを秋のまをまを
 同書のをま犬枕の条「あまのまをのまををたんまをまを
 柳公翁曰年立とまをまをまをに見ゆまを心見ふ十六の勤とす
 るとき此高尾寛文三年ふ出来し

ちん又前の吉原鑑に見まを格子高尾の事を記す
 別ふまをけい混雑せんと思ひてまを

同寛文七年印本吉原雀小女郎小名成つる度といふ条ふ
 小名名の付する其まをまをまをまをまをまを
 小名名成つるまをまをまをまをまをまを
 名を成つるまをのまをまをまをまをまを
 事ありまを大盛あまの侍りてまをまをまを
 き事ありまをまをまをまをまをまを
 町あれは名成つるまをまをまをまを
 格子まをまをのまをまをまをまを
 町ありまを尾おせ大と云ふ如く下略大高尾と云ふれ
 前の吉原鑑に見まを格子二人の高尾あまの侍りて三代高尾の如名
 すまをまをまをまをまをまをまを
 尾あまの侍りて全二代目高尾の餘光といふ



吉原雀ふ載
しる高尾の姿画
是三代目也



高尾十二

開板 吉原よぶ馬高尾の紋及禿の名を記の如くやアそとらと
あり 此目とさうづりてアそとらよぶ馬高尾の紋及禿の名を記の如くやアそとらと

名高としてあまねく世に傳へられたりといひしが事あり
野良の評判よ玉川千三郎がよりむとむむが如く千三郎が藝文
ほびるいもつてもあまねく教のうら美しといひのり盛ある時ありと
あつていもつてもあまねく教のうら美しといひのり盛ある時ありと
あつていもつてもあまねく教のうら美しといひのり盛ある時ありと

吉原袖のえん

梓彫の年号を 按寛文六年秋
増補 寛文八年の後ある証あり
ゆゑてふをさむ



アそとらよ
かまろせん

「名過り二代の先達全盛あり人あり」
跡(出る君あまねく大勢ありありがごとくやうてが
あまねく勿新過てありやうてがごとくやうてが
いそそとて根はひのりあまねくあまねくあまねく
ひそそとて根はひのりあまねくあまねくあまねく



袖
高尾の舞をまゝ見えり
高尾の舞をまゝ見えり
高尾の舞をまゝ見えり



○神ぞく何の教でいふぞ君家の情ふ何命あり

柳翁曰くこれ元高尾元吉原之轉譽妙身八万治之。三九高尾寛文也。此今高尾四代目也。大雑書の高尾と同一多事明之。此高尾より小延宝元年より勤とするとき九年目まで此草紙上木せし頃のこと也。此高尾出廓より始り最著振袖の高尾出来より

代々不筭高尾

吉原買物之調の巻尾不左の如くあり

高尾評

侍ハタカをとおもひあり海にけり
誠徳のきれきりありけり
相の二葉はくさる尾を縫ひありけり

高尾十八

思案未遠いあらんぞ
初秋の中旬を
のめみちわき
人ありてこの法や
けまんとまきの軸
海りりねのめり

此草紙例の梓彫の年号無巻中下職原の作者小近頃御
故の世に弟小紫が太夫格子下りる事と嘲るその文小

買物

肉々仕仕被木出入り
心を治し家所三つ
つとて友とて

小紫の事と記すに不用ふ似れどもこれよりして天和二年と考へ
しう按し高尾が袖留り天和元年の秋より前の高尾出廓の同
年欵此高尾天和二年の頃夭死なり同項小紫悪きとけり
小紫も出廓しし前ふ刊行の下職原ふもまんぐよ小紫を
罵りし事見ゆ

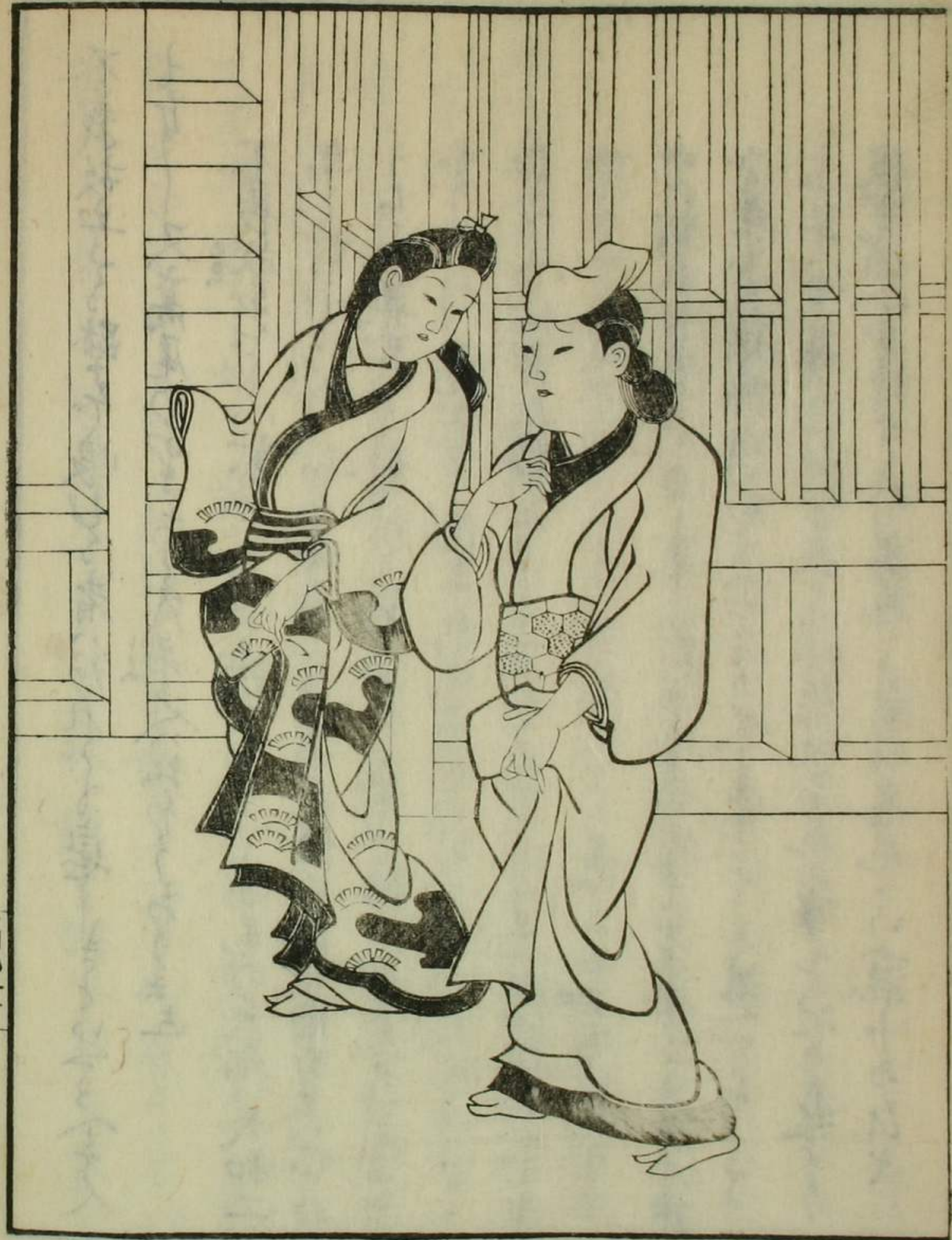
三
開板 吉原大豆俵 小新町三浦隠居内小泉といふ遊女を弟ふ出し
「尤三浦より高尾の君が跡とつばい小泉の君は二番ふくせんを
吉原の君のそとより尾の紅葉ハタの秋風よきとれりま名吉田川
みちる芳野の花は絶て知らぬ異國の海もろりと名をいつけりま
てま頭ふきりかき遊女あはれ小泉の君あはれま成むいひま巻
頭ふきりあはれま外に又万太夫を許して高尾が取身と思へ
箱ふきりま遊女といふ又角町久右衛門内小若狭を許す詞のうちよ小紫が

不義故出づる跡を恨むる者いられども悪きといふ人
もなり又高尾のあきあはれ吊人いひあはれありま

不義故出づる小紫といへば謗をもて高尾の夭死天和二
年と前ふもいひ如く考へり此高尾僅の間の勤あはれ代々の
うち小紫がれどもあはれ吊人多くあはれと記しを見まはる
をしまれ遊女より後年越後高尾といひは是欵前よはげし
評のうち小紫君越路の雪のまはるまはる生れしは彼國の産ふ
あはれやと風思ひしは書載ておまはる是より廿余年の後宝永
中の寫本 吉原の草上巻小紫後高尾道中一度毎小紫は小袖
を茶屋の娘揚屋のあはれやとて思ひしは是より
といふ世傳はけり下巻も此越後高尾の事といひ是より
後寛保小身請せり高尾といふ越後高尾といふ混ぶるひそ



買物調の画中は高尾の
 姿繪見えは豆俵ハ
 こゝに高尾段後の
 草紙あれハ
 ぞくぞく
 いそげ
 是ハあまのちあま
 べき画
 別本より模
 添へり





又云
如此の拙画
作も又
おもしろ
なり



此草紙全五冊開板の後
故より十余年の間遊
女の噂を書き草紙出
板絶つるも元禄十
六年小吉原頁二首と題
せる冊子ありて考証と
まじき事なり

高尾廿三

糸入
春原草摺子

此後宝永正徳に至りては画風今様ふうりの古雅と夾ひておもしろくハ摸写

六代目

六代目高尾の出来し年考べき便あり

奥村政信筆吉原遊女の姿繪

標題不知

の折本有り遊女の數廿人

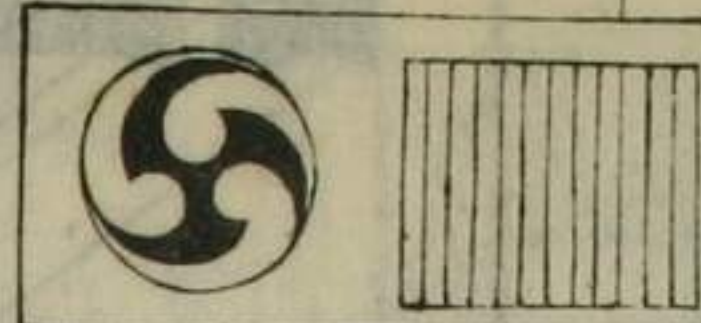
弟一春日野巻尾薄雲。第六高尾。奥書小正徳元年と記し或人の

話此年号の後彫改め之原板小元禄十四歳辛巳と有りと予思

小若當時元禄辛巳高尾出来し年若き故巻頭巻軸軸小載りり欣

宝永元

開板



奈小葉巻尾為云 三浦 四代目
智山公代小は三浦に市川若松
石珠にせは此柏橋白菊と云はれ
む若しをが傳を路に三浦一孝
幸の翠備美代と并傳り 三浦
あまのひもは三浦村のいし

宝永二酉春

圖工 石河流宣

柳翁曰巴三浦屋の替紋秋堅
筋ハ格子有る家の印あり

宝永年間の寫本吉原つれく草小西條巻尾方ききりてり
又妙心高尾西條油三又妙心高尾哉後高尾の事ハ

高尾世四

三

前記再曰此書其角の作といハ誤あり其証書中小大錢とい

事二所までつれバ宝永五年の後よあれ草紙之其角ハ宝

永四年二月廿九日没り又此書七十二段に決後ハ大磯の

出女砂のつり多にけりも十部をくき討分の款討との

沙汰と有りハ宝永四年十一月の事あり其角の没るハ二月

此二條をもて角が作ある事明あり

五

六

上略

開板 吉原大黒舞

高雄 太夫

此里を柳町よ取て繁昌の春と案すよりハ山本吉原と

三浦がさる尾とて万人是を忘るる今今の吉原よりつりたれ

る尾の名代に續き六代の後胤三浦のぬき雄とて島系新町

ハいぞ知れど此里においでハ一貴當千の若者あり 三浦と有り按

此六代目高尾ハ此大黒舞出板の年欵或ハ次の宝永七年の出廓あり

七

七代目

七代目宝永七年秋正徳元年秋六代目出廓の間もあく出来
僅のうちの勤めく正徳二年退廓 病死の噂ありき身請
せられ

開板 吉原七福神 小左の如く高尾と弟一ふ出と

高尾太夫 三浦四郎左衛門内

そのまゝ尾の傾城とすハ 中略 柳所と取て 工津和揚屋の
名をとりけ 初手の名をきき女郎より山幸の芳野三浦の言
尾といひあれ 花紅葉の色をとりて あはれ 暦の後新吉原
小ふされ 中略 金龍山の花より角田川の月より 中略 通より 中略
今言尾 中略 七代の色 中略 紅葉の系 中略 東夷
小秋の族 中略 君と知 中略 又次の年正徳
年の春再此七福神の草紙と摺より高尾の名と削その跡
花紙を出し末の 中略 左の如く彫改めり

高尾世

過し頃高尾廓とせし 中略 継ぎ明女あり花紙の君あり 中略
そび出 中略 座と 中略 是七代目正徳二年出廓の証と
と 中略 又同年五月發行の

吉原より 漆 小や如此高尾あり



三浦四郎左衛門
高尾
虎

位あつてたあが守輝執極て 中略
た 中略 二道 中略
の 中略

此を名二代目高尾
病死彼橋場正光
寺紅葉の塚ありし
の支あり全江戸
慶子ふよりて書
と見ゆれば 中略

近曾出来 高尾の事とい 中略 聞 中略 按ふ是は去年高
尾あり 中略 前 中略 改 中略 又高尾あり 中略
田舎 中略 草紙の賣 中略 故 中略 七福神 中略 去年發行 中略

今年の新村と思へんと彫改めし物と見ゆれば高尾さまに退廊し事必せし是九例の用捨ありえり漆とて七福神と用ふべき歟

八代目

今年高尾出来り其事下記 此高尾初奥州の禿志のふ

享保元 二 三 四

関板 吉原丸鑑 小

極上吉 高尾 定紋丸内楓の葉

是れは元祖高尾より九代の後胤をさふ名と志のふははまきの奥州といひ 君よつとそひひ心徳五年一何とて太夫の位よをえりあり 中略 清きもろもろして音曲たひありとどて名別あり相方よはれが閉り人ぞあり 中略 此里小三子余人の色ありとどて高尾と名有り君は一人してせられも美人あり

高尾廿六

敷情草蒲草

写小 高尾が困の手前ふの利休も茶抄を授けし事下記

九代目

此標目いとうと記しし事左に摸しし細見記の高尾八代目歟九代目歟考し得難し

関板一枚摺



を交 高尾 市川 玉川 馬喰町
あふらた川 小見 小見 小見 四町目
あふらた川 小見 小見 小見 中村屋板
上り記 ことよ せきを せきを せきを

馬喰町 四町目 中村屋板

そとく是は元祖高尾より十代の後胤成さふ名をまづやといひ今の揚巻の君の枝葉ふく享保十八年よりの勤よて太夫の位おほい備りぬ程あれが諸藝いす不及中略酒も少ありていん処あり歌うるは成好いよりつづきの花の夏あれがまづ高尾代々の夏跡いれみえあり淡少いれらるる傳はとり享保十八年といひ廿年の書誤くまありと先達の説既より同年刻三文字屋板細見も高尾より

三

細見記 三改松 名寄歌仙の第一



たま 三つ内 高尾
一両あわれるや人のたより

此細見ハ

鱗形屋板

序小「書初やまろくあろ煙始といふ」の高尾の歳旦もさすの君の年ちどめと合歡堂も賞美しぬといひ元文より昔といひ沾徳が讚しといひ元禄頃の高尾の句あまづ

高尾世九

同年標題と吉原見物左門とよ俳書あり是は吉原の遊女の名を題して千七百七十五号不角門入封兩堂頂角獨吟

京町右冬 大三浦や内

たま高尾 名も高尾の君やあま紅糸

春 江戸町夏 二丁目 秋 角町冬 京町 新町を月花とをさす

かゝる事のおこあをれ ゆゑ細見記も名寄歌仙と載るあまづ

四

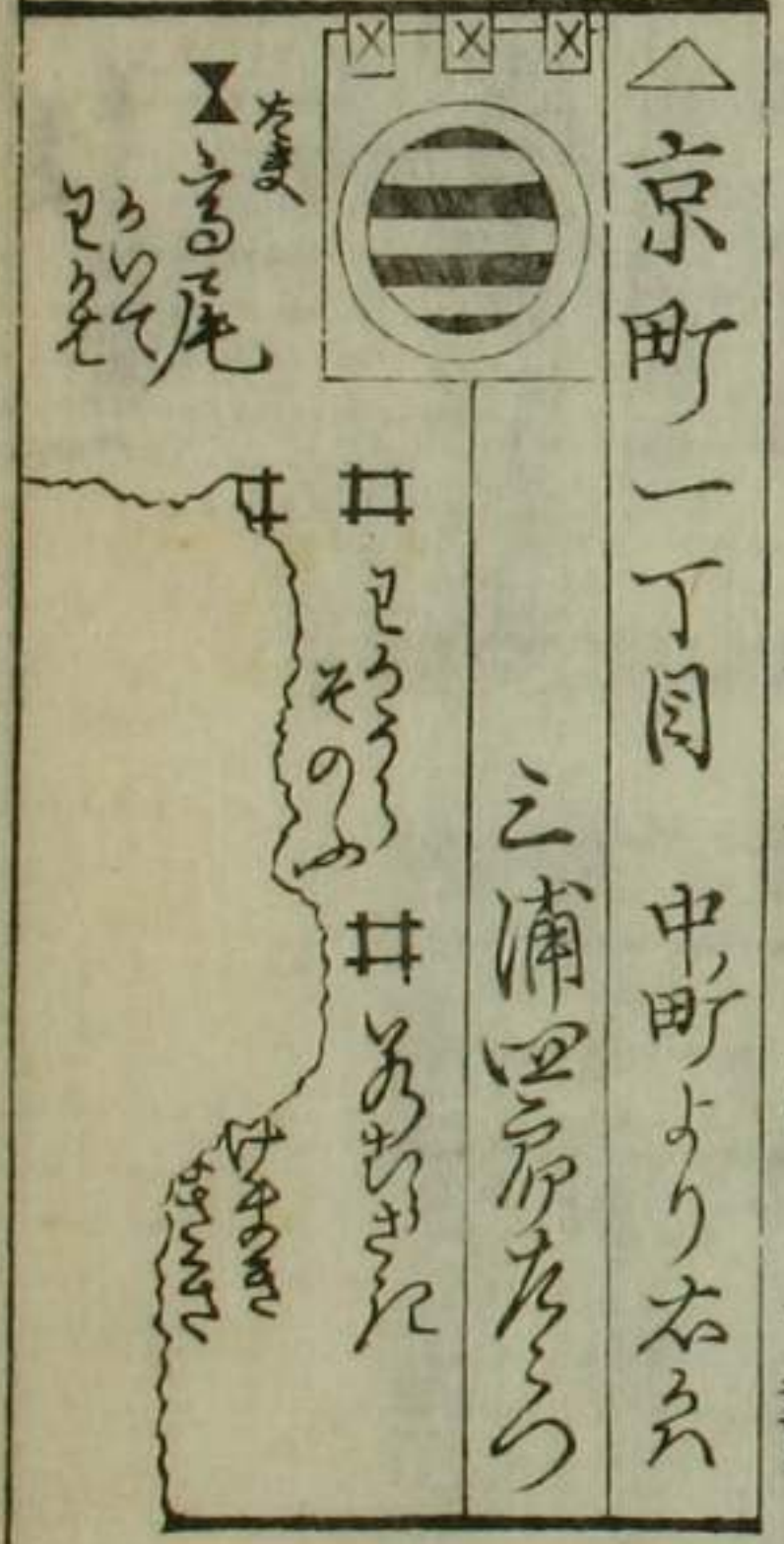
細見記 菜の花 小高尾あり

五


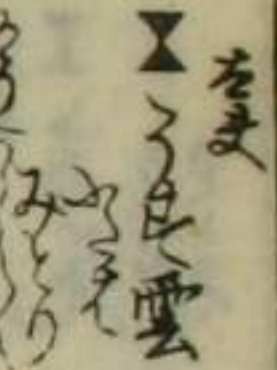
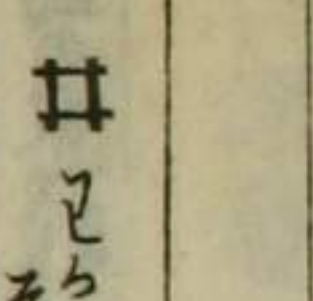

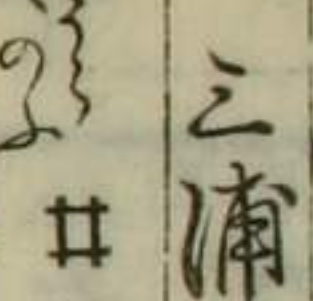

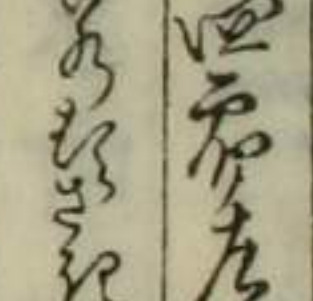
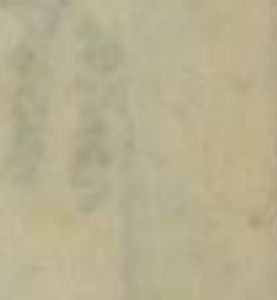
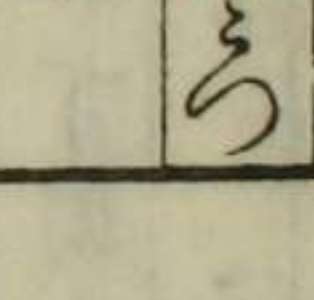
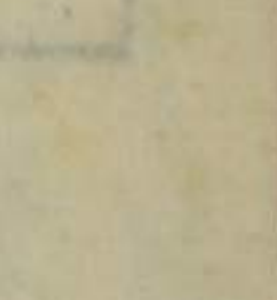
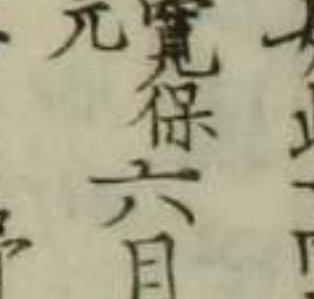
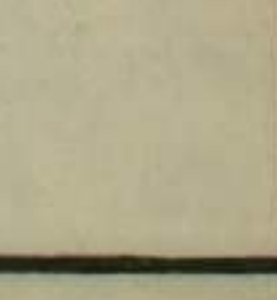
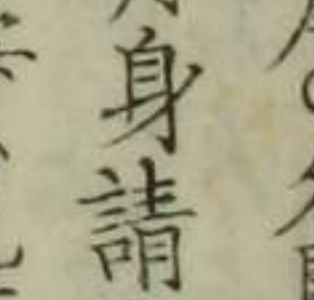
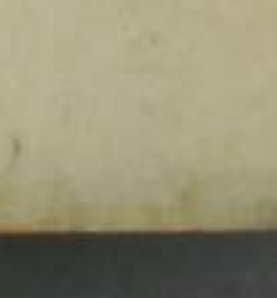
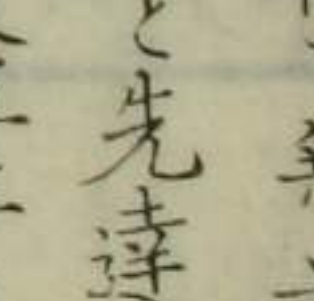

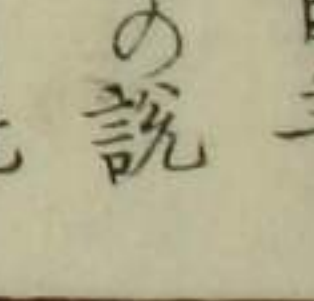

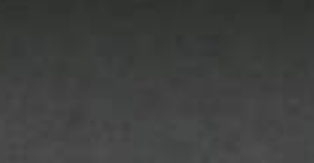
細見記 標題不知 小高雄あり 年々く名の絶く薄雲 三月三日より出せしと記せ

寛保元 細見記 鴛の思羽

如此寛保元年 高尾あり



春 細見記 里 鹿子

△京町一丁目	△浦田石丸
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△ 
△ 	△
△ 	△
△ 	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△
△	△

大傳馬所三丁目 山本屋丸左衛門板

如此高尾の名關く無し前年
寛保六月身請と先達の説
なり予按ふ元文五年より此
身請の沙汰ありゆゑ之に
四郎左門大夫の絶人事と思ひ
さき遊女と見えて薄雲の
名と継がせしむべし
此身請の事前書ふこと
く見えて
以上十代少く高雄絶く

高尾三十

○玉屋高尾

以下ハ唯年々の細見記の標題のほかにあげ他の引書ハ
省ヤ昔ハ細見記の板元多くあると一年のうちに四本
五本出板あるを夏あれば夏ふれれば最妙なり

- 寛保三年 外題不知 延享元 月 飛鳥川 山本 二 外題不知 鱗形 品定といふ
- 一 欵 三 寅春 一 同春 美里の春 山本 四 春秋 外題不知 寛延元
- 里の家名記 二 春 かぶろ松 三 春 香名傳本 此外題めづらし 忠臣蔵の浄瑠
- 序ハ當時おぼろげなれしとせしめ 宝曆元 春 吉原繪合 二 春 吉原燕 序紅 三 曙
- 原ハ則彼浄るまてよりて書り 袂の花 多智姿 五 入相の花 六 外題不知 滝の鯉とい
- ひ 欵 七 秋 紋盡 随筆用捨箱ふくば 八 春 花橘 板 沈香記 山本 九
- 秋 袖見臺 十 五色住 俳諧五色墨流行の項あり 以上高尾あり

宝曆十一年辛巳

初春叢書

細見記初録

高尾あり

玉屋山三郎あり太夫花紫を三月より出せし記

同年秋刻

細見記實語教

九十文

太夫

引船三八

高尾

つた

玉屋山三郎

とありて次の年

宝曆

春刻

道中集子陸

秋

里の地清

二本とも

高尾見えは是れ故ありて出づ間程あり名を改めしなりとぞ

柳亭種彦補綴

高尾年代記畢

高尾三十一

いふ一人の事なり故人を吊んとすふは
 けしは其好めふことなりてはるは若きと
 ち師翁世よいまそりし日著述を身の樂と
 ち骨董と思ひを耽らし玉いささかゆ急よ此高
 尾考し先輩の編みけりものふ自の考ふも
 加ふれり家よ花めありて師の旧友豊茂
 子かひよく志れり色ハ翁の苦心せしけり
 ものいふら小紙奥の拙とあらんハ本意ありて

を窺ふんとするに管のく大空を見るうよき學子ひよ
いつくきいあん業枯く年為るるやめられ業と拾ん
とせよもさるし心なき身ふれくくもあはる友人
同門の方とてやそを外におじと何あつたかおこ
きよも人ごころうつにけあつたあつたおれく思われぬ
とせよ好めらふいふはあつたいふよとん

遺弟

嘉永己酉仲秋

柳下亭種貞識

照心山一室の夜

東の事多病の種はしあは

大禪生 坊屋の僧

